

# 山と花のたより 106号

2009年11月10日 松尾

メールアドレス tadashi6414@smile.ocn.ne.jp

## 弥山川上流部・頂仙岳登山

登山日 2009年11月9日(月曜)

参加者 松尾(リーダー)、河島 澤木  
松下 吉川

行程 5:00 葛城市當麻庁舎集合

6:20 天川村熊渡着

6:25 登山開始(弥山川沿いの林道を)

7:20 林道終点部

8:40 熊渡分岐

9:33 川原小屋着

11:25 狼平着(昼食)

11:45 出発

12:03 高崎横手着

12:20 頂仙岳頂上着

12:45 熊渡分岐点着

14:05 林道終点部着

14:30 白川八丁(寄り道)着

15:15 熊渡(駐車場所)着

15:45 天の川温泉着(16:30発)

18:00 旧當麻町庁舎駐車場着



ぶら下げられた鎖梯子は揺れて登りにくい



「空中回廊」を行く一行



写真上 左リンドウ 右アケボノソウ

この日集合した時刻は5時で、空は真っ暗ですが、天気は晴れて登山には最適でした。

登山を開始して、しばらく歩くとリンド

ウヤアケボノソウの花が咲いていて、帰りに写真を撮ろうと言いながら先に足を進める。

しばらくして、白川八丁方面に行く分岐点を通り、さらに林道を進む。

やがて、林道も終点部になり、ここで小休憩し、いよいよ本格的な登山を開始。かなり急な坂を登ると、熊渡分岐点に着く。このあたりはブナ林が美しい。

ここから川原小屋方面に行く登山道はテープによる目印だけだから、素人では迷ってしまいそう。

弥山川に降り着くと、なつかしい小屋がある。ここで小休憩し、さらに狼平に向けて出発。

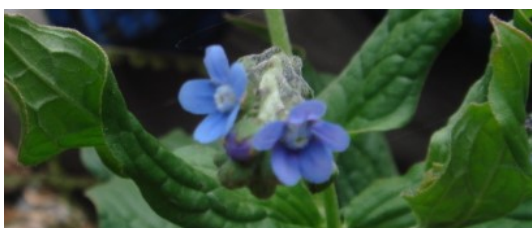
川沿いに、登って行くが、道は険しい。岩壁に鉄筋だけが打ち込まれた空中回廊や鎖場が続く。

男でも足がすくむのに、女性の吉川さんも勇敢に登山して行く。滑落したらイチコロで死にそう。

狼平の小屋は先ほどの小屋より立派だった。ここで全員昼食をとった。

下山する途中に頂仙岳に登り、頂上から大峰山系の山々を眺める。はるか彼方に、二上山？らしき山陰が見えた。

いよいよ、本格的な下山が続き、下り坂が長く続く。登る時より、下り坂の方が危険を伴いそうで、気を付ける必要がある。やがて、駐車場に着き、楽しい登山が終わった。  
(記録担当 河島さん)



狼平に到着



写真上 コリンゴとも呼ばれるズミの実か



←オニルリソウ ↑ 頂仙岳山頂で山座同定



## 二上山だより 大型ゴミ回収の抜本対策を

毎朝二上山でゴミを拾って持ち帰る方がおられる。それも一人二人ではない。私が所属している登山クラブも毎年クリーンハイキング（清掃登山）には必ず参加し、今年は多くの二上山早朝登山者の方々も参加された。

こうした努力の積み重ねのお陰か、ゴミ持ち帰りが徹底したのか、山にゴミが少なくなった。本当に有り難く、喜ばしい。

しかし、「なぜこんな所にゴミを捨てるのか」と唾然とさせられる事はしばしばあり、見えない相手に「恥ずかしくないのか」と大きな声を出したくなる。

そして登山道から車道に下りてきた時に、その思いは更に強くなる。わざわざ車で運んで来たであろう大型ゴミが林の斜面に散乱しているのだ。こうなると個々人の善意や努力では、どうしようもない。お手上げだ、そしてそれだけに無性に腹が立つのである。結局自治体が税金を使って回収して処分することになる。なんという無駄だろう。そして財政難の自治体では、不法投棄は長期間放置されたままになる。

このゴミ問題は深刻なだけに、嘆いたり個々人の非常識をなじっているだけでは解決しないのだ。人間がしでかす事だから、人間が解決する責任を負っている。

この問題は抜本的な対策が必要だ。もともと「大量生産・大量消費・大量廃棄」の生産のあり方が問題なのだ。つい先だってまだ新しい電話器を床に落としてファックスが半分しか印字できなくなった。修理に出すと「部品がなく、買い換えた方が安い」との回答。結局捨てるしかなく、企業は儲かるだろうが勿体無いし、ゴミは増える。

また電気製品などを処分しようとしたら、現在は消費者がその費用を負担する仕組みになっている。例えば大型冷蔵庫なら 7830 円、16 インチ以上のテレビなら 4835 円かかる。生活苦の時代にこれは痛い。一方酒屋さんに持ち込むとビール瓶 5 円、一升瓶 10 円の返戻金が貰える。ビール瓶の回収率は 99%、平均 15 回再利用されている。



當麻寺奥の山林に放置されている乗用車



山口神社近くに捨てられているテレビ

デポジット（預託金）制と呼ばれるこの制度をペットボトル、缶、乾電池、電気製品、自動車などにも適応すべきだと思う。欧米ではすでに実施がすすんでいるこの制度が、日本では主に業界の反対で進まない。大企業に「製造者が製品について最後まで責任をもつ」と言う当たり前のことを守らせないと、日本の環境汚染は止まらない。（以上 106 号）